- [343] -

氏 名(本籍) **齋藤** 一(北海道)

学位の種類 博士(文 学)

学位記番号 博 乙 第 1986 号

学位授与年月日 平成 16年1月31日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

審 查 研 究 科 人文社会科学研究科

学 位 論 文 題 目 英文学の脱構築-日本における英文学と < 脱亜入欧 > および < 近代の超克 > と

の関係についての一試論

筑波大学教授 博士(文学) 加藤行夫 主査 筑波大学教授 博士 (文学) 副 查 荒木正純 副 査 筑波大学教授 名 波 弘 彰 査 筑波大学講師 吉 原 ゆかり 副

副 查 東京都立大学助教授 Ph.D. 本 橋 哲 也

論文の内容の要旨

本論文は、近代日本の成立に際して「英文学」がいかなる役割を担わされてきたか、その受容の実態はどのようなものであったか、そこにいかなるイデオロギーが働いていたか、といった問題を詳細に調査し論究したものである。全体は、序論、本文5章、結論から成り、末尾に参考文献一覧が付されている。

序論「英文学の脱構築」では、著者の問題意識とその契機となった先行研究の確認がなされる。日本において「英文学」とは一体何だったのか。こうした疑問に取り組んだ先行研究に、正木恒夫『植民地幻想』(1995年)、宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』(1999年)、そして山口誠『英語講座の誕生』(2002年)がある。これらは、〈脱亜入欧〉(アジアを脱して欧米に入る)や〈近代の超克〉(日本の自律性を目指す)という、西欧を意識した日本の国家的プロジェクトの中において、「英文学」なるものがどのような機能を担っていたのかを批判的に分析したが、本論文は、これらの研究が扱わなかった事例を取り上げると同時に、〈脱亜入欧〉や〈近代の超克〉というプロジェクトの中で構築された「英文学」が、こうしたプロジェクトを揺るがしかねないような要素を含み込んでいたことを明らかにすることで、「英文学」の豊かな土ネルギーとその可能性を示そうと試みる。

第1章「済州島のロビンソン」においては、英語学者・市河三喜の旅行記「済州島紀行」が取り上げられる。宮崎芳三は、齋藤勇『イギリス文学史』(1927年)に、「一生懸命に勉強して戦争(政治)をすり抜けようとする態度」の始まりを見いだしたが、齋藤の同僚であった市河も、著書『英文法研究』(1912年)において、英語の背後にイギリスという存在を読みとって一喜一憂するのではなく「公平に観察」する態度の必要性を訴えていた。つまり、市河も、宮崎の言う「英文学」的な態度の創始者とみなることができる。しかし、その市河は、「済州島紀行」(1906年)の中で、朝鮮人とアメリカ人との狭間でアンビヴァレンスを感じる日本人としての自己の姿を書き込んでいた。そして、そのアンビヴァレンスを、ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』の主人公であるイギリス人植民者に自己を重ねることで解消しようとする自らの姿をも書き込んでいた。しかも、一方で「公平な観察」の必要性を説きながらも、他方でこのアンビヴァレンスに

満ちたテクストを繰り返し世に問うた。市河のこの「ねじれ」は、学問の政治性を問い直す重要な資料となる、と著者は考える。

第2章「英語青年の本分」では、ジョウゼフ・コラッドの小説に対する読解が問われる。1915年ごろ、福原麟太郎は、イギリス人水夫の優秀性を説いたイギリス中心主義的な小説と言われる、コラッドの「青春」を読んで、主人公マーロウに同一化し、涙を流したという。これは、1898年、維誌『青年』(後に『英語青年』と改題、英語タイトルは The Rising Generation)の創刊号が、英語と日本語の、イギリスと日本の圧倒的な差を意識して、イギリスと同一平面上に並べるように "rising" しようと読者に訴えていたことと対照的である。こうした "rising" は、コンラッド「青春」のような小説を読むことによって培われた。イギリス中心主義的だと思われがちな「青春」は、イギリスが19世紀末に直面していた様々な現実を棚上げして、「東」と「西」という抽象的な構図を強調した小説でもあった。1904年、雑誌『英語青年』は、こうした抽象的構図が強調されたコンラッド「青春」を注解のかたちで読者に提供することで、イギリスと同等の地位への "rising" を希求する日本人のニーズに答えたのだが、しかし、同じ雑誌が、この "rising" の気運に水を差すような記事も掲載していた。このような興味深い事実にこそ、「英文学」受容の複雑さがある。

第3章「沖縄からの返書」は、岡倉由三郎の翻訳を再読する。サモア島に移住した R・L・スティーヴンソンの短い寓話 "The Cart-Horses and the Saddlle Horse"は、サモア島産の馬とニュージーランドから輸入されてきた馬との会話という形式をとった、サモア島人と植民者との関係を諷刺する作品である。興味探いことに、この作品を日本で翻訳紹介した岡倉由三郎は、"Samoa"を「沖縄」、"akanaka"を「琉球人」と翻訳していた。しかし、この翻訳は、沖縄に対する岡倉の深い共感を示すものではない。むしろ、サモア島の状況を観察するイギリス人作者(ステイーヴンソン)というオリジナルテクストの構図を、沖縄の状況を観察する日本人翻訳者(岡倉)という構図に置きかえることで、ステイーヴンソンと岡倉、ひいてはイギリスと日本が同一平面上にあることを読者にアピールするという目的があった。そして、岡倉は、言語学者であった若い頃からこうしたアピールを行なってきたのである。ただし、岡倉の翻訳は、実際に沖縄に住む読者からの手紙によって、見事に批判されることになった。

第4章「日本の『闇の奥』」では、中野好夫の翻訳が対象となる。1940年、中野が訳したジョウゼフ・コンラッドの小説『闇の奥』は、当時人気のあったアンドレ・ジッド『コンゴ紀行』と同様の、西欧人自身による西欧植民地主義批判文書として世に出た。しかし、中野が翻訳に用いた訳語(「恭順蛮人」)を検討すると、彼は、おそらく無意識にではあれ、『闇の奥』という西洋植民地主義批判を、台湾における日本植民地主義批判に置きかえていたことが理解できる。西欧植民地主義と日本植民地主義の違いを強調することで海外進出を正当化し、〈(西欧)近代の超克〉を唱えていた時代において、中野の翻訳は、両者の類似性を暗示したという意味において重要である。

第5章「英文学者、中島敦」では、中島敦の小説が論じられる。1942年、少なからぬ英米文学者や翻訳者は、西欧人による西欧批判文書を積極的に日本語に翻訳することで、西欧植民地主義を批判しつつ日本の植民地主義的進出を正当化するという国策に関わっていたが、この点、中島の『光と風と夢』(1942年)は興味探い。この小説は、サモア島に移住したのち、米・英・独の植民地主義的政策を批判した、R.L.スティーヴンソンの反西欧植民地主義的文書を大胆に取り込んだ作品であり、その意味で、当時の日本の国策にかなった作品だった。しかし、この作品に国策に反する部分を感じた読者も存在した。それは、西欧植民地主義を批判する西欧人ステイーヴンソンが、日本植民地主義を批判する日本人中島敦に読めてしまうということ、すなわち、本文中の「私」(ステイーヴンソン)が作者中島敦であるところの「私」と重なって読めてしまうような、テクストの語りの構造と関係があるとひとまず考えることができるだろう。

結論として、著者はこう述べる - 本論文は、〈脱亜入欧〉と〈近代の超克〉という、全く逆の西欧と日本 との関係を代表する国家プロジェクトと、英語で書かれた作品を日本において読むという行為との関係を論 じつつ, その関係が内部から破綻し, 新たな可能性をかいま見せる瞬間を見出そうとした論考, すなわち, 英文学の過去を探り新たな可能性を求めた論考である。

審査の結果の要旨

本論文は、20世紀前半の日本における「英文学」受容について、その時代のイデオロギーとの有機的な関係性のなかで、膨大な資料を渉猟して論じた研究である。歴史の一時期、一定の国策のもとに生成された意識・無意識、あるいは、東洋と西洋の狭間にあって揺れる微妙な意識・無意識を、「英文学」という触媒を用いてありありと表出させた好論文である。

従来いわゆる「英学史」研究というものはあったが、その多くは事実の羅列に終始するもので、「英文学」とは何かといった根源的な問いを発するものではなく、また、国家意識のダイナミズムや受容者の微妙な精神性にまで立ち入るものでもなかった。本論文の独創的な価値は、まさにその未踏の領域に果敢に踏み込んだ点にある。

加えて、高く評価されるべきは、「英文学」の受容を決して単眼的に見て済ますことなく、〈脱亜入欧〉と〈近代の超克〉という相反する2つのベクトルによって突き動かされてきた近代日本が、しかし同時に、こうしたプロジェクトを揺るがしかねないような要素をも内包していたという複雑なメカニズムを明らかにしている。著者にとって過去の「英文学」受容は単に批判の対象ではない、批判の後に(あるいは同時に)なすべき構築の試みでもあり、それが本論文のタイトルを「英文学の脱構築」とする所以である。

また、本論文の秀逸さは、これまで注目されることのなかった資料を広く深く掘り起こして、丹念に読み解いている点にある。先行研究の類書には扱われることのなかった一次資料を次々と発見し、それによって説得力ある議論が展開されている。資料には、すでによく知られた小説などもあるが、その翻訳を再読する精緻さは見事である。この種の文化研究はともすれば議論のみいたずらに拡大し、個々のテクストの読みが等閑にされがちだが、地道な読解に支えられた著者の議論は極めて安定したもので、さらに豊かな研究へと発展することが予感される。

問題点が残るとすれば、本論文で扱われている研究者や作家が決して網羅的とは言えないことで、著者の研究当初の関心からか、作品がコンラッドとスティーヴンソンのものに偏りがちなこと、また取り上げられた日本人研究者および作家も限られたものとなっていることだろう。さらに願わくは、翻訳や翻案だけでなく、広く「英文学」の教育や研究がいかになされていたか、そして、そもそも文学の「受容」という実態が多面的に実証されるところまで議論が及べばさらに価値の高い、興味深いものとなっただろう。

これらのことは著者の力量をすれば早晩達成されるもので、いずれにせよ本論文は、日本における「英文学」という制度の成立を論じた最初の研究書と言え、資料としても方法論としても、あとに続く研究の指針となることは間違いない。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。